

患者自身の治療終結への思いと看護師の支援

杉本 朱実、神原 好美、浅井 麻利子、中岡 義晴、森本 義晴

医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

生殖医療の進歩により、恩恵を受けることのできる夫婦は増えているが、全ての夫婦に子どもが授かるわけではない。難治性の不妊症では、「努力したのに報われない」というこれまでの体験にはなかった試練が繰り返される。患者は、思い描いた未来が実現しないという悲嘆や苛立ち、また自責の念を抱くこともある。不妊治療は、「先の見えないトンネルの中にいる感じ」と例えられ心理的ストレスは図りしれない。患者は、医療者に「いつまで治療を続けてよいのかわからない」と辛い思いを語られる。

一昔前までは、治療終結するということは「夫婦二人だけの生活」もしくは、「養子縁組」を選択するということであったが、現在では、第三者による卵子提供も選択可能となってきた。但し、卵子提供では母親との遺伝的なつながりをもたないという大きな現実があり、患者はこの選択肢が増えたことで様々な葛藤が起こり自己決定に混乱を招いている可能性もある。

患者は治療の終結時期についてどのように考えているのだろうか？年齢なのか？医師から終結を告げられるまでなのか？自分自身が納得できるまでなのか？このような患者自身の心理を理解することで、看護師の関わりや支援の方法が見いだせるのではないかと考えた。今回、患者にその趣旨を説明し患者の意識調査を実施し、治療終結に対する思いを検証した。

不妊治療は夫婦で取り組んでいくものであるが、治療に対してどちらか一方だけが積極的もしくは、消極的であったり、夫婦間で治療に対する思いが違う場合もある。その場合、妻の治療のストレスはより増してしまう。夫婦は、時には立ち止まり原点に戻り「夫婦とは？」「家族とは？」「なぜ子どもが欲しいのだろうか？」「誰のために子どもを欲しいのだろうか？」など、言葉にして話し合うことが大切である。そうすることでパートナーをより理解でき、思いやれる気持ちが芽生え、最終的にはお互いに歩み寄りがみられることもある。

生殖医療に関わる看護師は、常に患者の声に耳を傾け、それぞれの夫婦の価値観を尊重し、必要な時に適切な情報提供をすることが大切である。また、患者の表情や思いを受け止め「変化に気付く感性」をもつことが看護師として最も重要であると考えている。さらに終結を迎えられる時に、晴れ晴れとした気持ちで次のステージに向うことができるようサポートしたいと考えている。